

勝林寺寺報

光明月日に勝過して
超日月光となづけたり
釈迦嘆じてなおつきす
無等々を帰命せよ

阿弥陀如来さまは、ひかりのはとけさまです。
その如来さまの光のおちからを、十二にわけて
たゞえられきました。
その十二番目の讃歌がこの「ご和讃」です。い
わば光のいろいろな力を総まとめして讃えられた
うたであります。

「無等々」ということばだけが少しわかりにくく
いでしよう。これは「等しくひとしきものな」き
如來さまを、ということです。
さて、この世界のうち、日月の光ほど有難いも
のはないでしよう。
太陽エネルギーより強いエネルギーを科学はま
だ作り出すことはできません。日の光のもとでこ
そ地球上の生物は生きつゝけてこれました。月の
光によつて過去どれだけの人が慰められたことで
しようか。
しかし、そのように有難い日や月の力を知るだ
けに、また反対に、日や月の光の限界やおそろし
さも知らなければなりません。

日月の光によつて、ものの形の見分けができる
反面、ものとのとの間に張り合いやら争いがう
れます。
日や月は、だれでも分けへだてなく照してくれ
るよう見えますが、照らす裏側には暗い夜の影
がでてしまします。
現に、「日・月は、あかしといえど、我がため
は、照りやたまわぬ。人みなか、我のみしかる」
(山上憶良「貧窮問答歌」と、「陽のあたらぬ」
ところでくらさなければならない人々がたくさん
います。

如來さまの光明は、月や日の光に勝りこえて
い

る。だからこの如來さまを昔から「超日月光如來」とよびしているのです。

月や日の光を超えているということとは、光のな
かに夜の闇をつくつたり、據いてくらさなければ
ならない人を残したりはしないということです。
闇をも涙をも、いつでもどこでも・だれでも
照すのが如來の光だということです。
いえ、もつとつこんで言うならば、如來さま
の光は、夜をこそ闇をこそ涙をこそ照そうとはた
らいてくださる光だということです。

天親菩薩という方は、このことを、「仏恩の明
淨なることは日のごとく、世の癡(おも)かなる
闇冥を除きたまう」(如來さまの智慧の光の明る
き淨さは、ちょうどお日さまの光のようであつて
むしろ世のなかの愚痴な者・くら闇のなかにいる
者をこそお照しくださる)といつておられます。

成式おめでとう
出石坪口矢根市場小谷正法寺栗尾大田数数澤宮大金永中成
正法寺
栗尾
大田
中
月
重
美
一
哲
則
也
章
子
苗
則
也
智
津
安
鯉
由
康
敏
早
秀
哲
秀
み
ゆ
き
子
子

今年は右の十一人の方がめでたく成人
式を迎えました。その人々に次の「論
語」のことばを贈ります。

父母ノ年ハ知ラザルベカラズ
一ハ則チ以テ喜ビ
一ハ則チ以テ懶(オソ)ル

父母の長寿をまずもつて喜ばなければなりません。
それからもう一つ、父母の恩を忘れてはいる私自身の生き方
を改め、おそれなければなりません。

弥陀成仏ノコノカタハ 今二十劫ヲ経タマエリ
法身ノ光輪キワモナク 世ノ真実ヲテラスナリ

ご開山親鸞さまもまたおつしやいます。

【如來さまのお年を知らなければなりません。

お釈迦さまの教えによると、「今二十劫ヲ経タマエリ」お年
は十劫という無量のお年ということ。

その如來さまのお年を知つて、一は則ら、十劫という遠い昔
から、および通じお照し通しの、光といのちの如來さまであつ
たことを知らせてもらうこと。それからもう一つ、その如來の
光につままれながら、自ら目をふきぎ。あえて暗闇の中に閉
じこもつて「世ノ眞實」である私を、おそれはじなければ
ならない。

父母ノ年ハ知ラザルベカラズ
如來さまのお年を數え数えて、もつたない。おはずかしい
どういたかせてもらおうではないかと
おすすめ下さったのが親鸞さまであつたのだと思います。

(「勝林寺テレホン法話」より)

永井 淳希ちゃん

お正月に 初参式

八尾市在住の永井良明
美智子さんの二男
永井淳希君

が お正月、故郷但東町
矢根に帰つた機会に、
祖父母永井貞雄・ひろ
子さんに伴われて、父
母ともども初参式にお
参りになりました。

一月二日で寒い日でした
が、ほつべをまつかけた
にした元気な男の子でした。名前のようにす
なおに希に受けたいの
ちを大切に育つてほし
いと念じました。



二月のこよみ

一日 代議員会
三日 前々坊守祥月。東京築地本願寺研修会
六日 岩出酒一郎氏宅祥月
八日 「玉日会」



（「勝林寺テレホン法話」より）

「南無六字」の城

顯如上人の四百回忌が昭和六十六年につとまり
ります。

頬如上人は本願寺第十一代のご門主ですが、例の織田信長天下征霸の軍勢と、石山本願寺（今の大坂）に拠つて十年余最後までたゞかいなかれた方です。仏教とくに念佛を弾圧した武力とたかつたこの頬如上人の石山戦争には、この但馬からも、大勢の念佛門徒が「南無阿弥陀仏」と書いた「むしろ旗」をかゝげて参加しました。

本願寺基京都移転四百年法要の消息
顯如宗主四百回忌法要

米の御紀六十六年は、本願寺第十一代親王上人の回向願におだり、また上人が寺墓を京都大穴に定められて、四年とての記念すべ年でもあります。在土實宗は立教開宗以来、あたし七百十十余年の歳月を経ましたが、その間にはさればれぬ危機の時代があつた、なかで毛利元就上人の注進は、最もきびしこ苦難の時代の一つであつました。京都鎮西守創始された本願寺は、第八代親王上人のおん時、越前守を経て京都石井に移りましたが、第十代親王上人の天文元年、武火に焼け、寺墓を大坂石井に移しました。

されねば、たゞそれでは群衆あらんうつ戦国本末の亂原風にあらうたまは、やれ、變動激しく
社會において、上人は内外の眞實をひきしめ、腰懸けられ、生の中央攻撃など、公法のう
まく、この宗祖の意図を保つて、かたわらの自然を顧み、日本への道を進む。
歩みつけられたが如し。しかし、徳國の日大をなして、御井井あつて、争う戰國の世が、ある
ては、本願寺もその外にあらうといたぐりや、終争の純中、にせられ、五輪大聖
極めて多事多難の時代がひきかへつた。

このときあたりて、上人となし、金剛の道じても承る京祖聖人の遺跡といとも、身
命をさげて、祖廟を守らひ、ひそひそひ大坂古石本願寺を退いて、和泉、和泉、和泉、
大坂天満へと移られ、元十五九年、京都の現在地にて寺を定めたのである。

その後、西園寺の傳はる體に、京祖聖人の御死後、かくて、京都市へ寺基移転されたとの傳
年、文慶元年に、おとと年中八十歳で、ゆゑぬ御土くべにて、御火葬、和泉、和泉、
本願寺は、十人の焼かれた草履の上にて、呂麻井の露柱を燃やして、またの御火であつた。
哉、世の主、不覺じやねのいへんなりの心に、痛い死をかかへられた上人の御遺體にて、
細きよせか、御詠の入びとなり御弔ひのいき、此の可き締まる想へがいたじめ
す。

今日のちがひの風を風つらぬかしむ。本願寺は、おとと西園寺の傳はる體
の欲望を潤すために、廻づられ、人類の存続も危うくおれるようになつてしまつた。
宗祖親鸞聖人が顯わされた淨土真言の法を聞き、無能阿弥陀法をいただいて生き
るといひの趣い御殊があるたゞて、想ひ、といつてあらま。

このたびの本願寺出世計画を運営する、淨土真言流の流れをくむ方が、おもろ
み教説を世間にさして次の生徒達が、御井井あつて、講義の計画の運び、改修、毀謫等の事
力され、立法規則の運営を深く理解する、おもろむかよつて心ならし念願するが、現
在あります。

龍谷門主
釋
即
如



「勝林寺寺報」でその都度ご連絡しますが今年もよろしくご協力ください。（山鼎会長　藤川貴典）

その「願い」を私たち門末にお示しくださつたのが上掲の「ご消息（おてがみ）」です。

頗如上人の時代と同じように現代は、「もの」によつて「こころ」が攻めてられてゐる時代です。

いまこそ「お念佛のこころ」を私たち自身いただきなおさなければなりません。

祖先たちのあとに従い、私たちも「念佛の城」への奉仕をしたいと念じます。

ご門徒お一人お一人のお力添えを心からお願ひいたします。

鄙如上人の時代と同じように、時代は、「もの」によって「こころ」が攻めたてられている時代です。いまこそ「お念仏のこころ」を私たち自身いだきなおさなければなりません。

そこで、この隣接地を、お念佛
ご法義発展のために大切に活用す
る事業のなかで顕如上人・寺基移
転のご法要をおつとめすることに
なりました。

その「願い」を私たち門末にお
示しくださつたのが上掲の「ご消
息（おてがみ）」です。

となりました。
あたかも、お念仏の城を守りぬ
いてくださいつた頃如上人の四百回
忌を迎えようとしているそのとき
に隣接地取得ができたことは有難

今度、ようやく本願寺北側の広大な隣接地（

天皇の仲介で和睦が成立して本願寺はやがて
京都の今の地に移転したのです。
それ以後も私たちの祖先は、このお念佛の城
を守るために、あるときには労力奉仕に出かけ、またそれの部落に「門徒講」「念佛講
などを組んでご本山をもりたてまいりました

仏婦評議員会の報告



昭和六十一年度『出石組念佛奉仕団』を
左記の要項によつて実施いたします。
お忙しいことは存じますが、さそい
あつてご参加ください。

勝林寺ではこの奉仕団のとき に、年間物故者の納骨式を大谷本廟で行 なつておりますので、ご遺族のかたは必 ずご参拝ください。	
記	
とき	四月十日（金）～十一日（土）
宿舎	本願寺門徒会館
費用	一万五千円
日程	四月十日
	五時 出石集合
	五時十分 出石出発
	本山到着後 結団式・奉仕作業
四月十一日	午前中奉仕作業
	午後 大谷本廟納骨式
午後八時	出石帰着
観光	予納金二千円と共に二月二十八日 までに各寺院へ
申込	

黒豆ジュース

(材料) 墨豆(一カツブ) 水(豆の五倍量) クエン酸
(小) 砂糖(四カツブ)

作り方

一 黒豆をよく洗い、五倍量の水を加えて火にかける。余りぐらぐらさせず約二十分煮る。裏黒い水が出る。

酸を加えると、黒い水が、たちまちに、グレープジュー
スのようなきれいな色に変る。

